# 未来に生きる人々のために

# 安西祐一郎

独立行政法人日本学術振興会理事長・前中央教育審議会会長

皆様こんにちは。ご紹介いただきました安西です。本日はこの学会大会にお招きいただき、ありがとうございます。「未来に生きる人々のために」と題した話をさせていただきます。このような抽象的な題をつけたのには、次のような理由があります。

高大接続改革の総論については「話は分かるよ、これからアクティブ・ラーニングの時代だ」と皆さんがおっしゃいます。しかし各論になると、「そんなことはできないでしょう」「センター入試に変わるテストとはどのような問題が出るのですか」「採点はどうやるのですか」という質問をたくさんいただきます。そこには、「今求められている教育の転換をなし遂げてくれるのではないか」「どうすればうまくいくかを示してくれたら自分も乗ってもいいかな」という消極的な姿勢を感じてしまいます。

ただ、実際に高大接続改革で取り組むべきことは、これからの時代に生きていく学生、 生徒、子どものために何をしていくべきかを、教育者だけではなく多くの人たち、つまり 私たち一人ひとりが考えるということです。これは、大人の問題であり、学生の問題でも あります。私たちは「こういうことはできないから仕方がない」と言い切って、そのまま にしておいてよいのでしょうか。

未来に生きる人々のために、自分たち一人ひとりに何ができるのか。この問題が、私の 頭を離れないため、本講演のタイトルにしました。

本日は、高大接続改革について、また、初年次教育の例として「Future Skills Project 研究会」(FSP 研究会)の活動について、具体的にお話しします。

初めに高大接続改革についてです。先ほどの趣旨説明で菊地先生がおっしゃっていたように,これからの時代に主体性をもって多様な人たちと協力しながら学び働いていくためには,思考力,判断力,表現力が必要です。そして,その三つの力は,基礎的な知識・技能を持っていなければ発揮できません。

では、思考力、判断力、表現力はなぜ身につけなければならないのでしょうか。ここには、主体性をもって特に多様な人々と協力して学び、将来、働いていくことを含みます。

学校教育法の小学校の項目では第30条2項に「主体的に学習に取り組む態度」と書いてあります。中学校については第30条2項を準用すると第49条に、高等学校についてはやはり第30条第2項を準用すると第62条にあり、「主体的に学習に取り組む態度」は、法的には小学校、中学校、高校にまたがっています。

しかし、中央教育審議会の答申では、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」と変えられています。答申で「多様な人々と協働して」と改められているのは、なぜでしょうか。

18歳人口のグラフをスライドに示します。1993年頃から日本の18歳人口が急減し始め

ました。1990年代初めですから、日本国内では経済バブルが弾けた時期です。この時期に大学を卒業した人たちは、フリーター率が高い世代になっています。同じ頃、世界では大きな転換が起こりました。象徴的なのは、1989年のベルリンの壁崩壊、1990年の東西ドイツの統合、1991年のソビエト連邦崩壊などです。そして、世界はグローバル化時代に入りました。1990年代の半ばにはインターネットが商用化され、デジタル携帯が普及し始めました。このように、1990年代初め頃から世界は大きく変わっていきました。

今のように変化の激しい時代には、「主体性を持って多様な人々と協働して」を字面だけ見て「そうですね、そういう時代になるのですね」と、ただ表面的に捉えていても仕方がありません。この重要性を本当に理解できるかどうかは、今の学生が、10年後、20年後、30年後に、どのような社会でどのように生きていくかを想像し、どのような教育をしなければならないのかを、先生方一人ひとりが主体性を持って考えていけるかどうかにかかわってくると思います。

18歳人口が減っていく時代,世界が激変していく時代,その時代に生きていく学生,生徒が何を身につけていかなければいけないか。これをしっかり考えていかなければ,高大接続改革の意義は見出せないでしょう。日本には短期大学を含めて1,000以上の大学があり,それぞれに異なる背景と状況を抱えています。現在の日本の初等中等教育,高等学校教育,初年次教育の状況の中で,子どもや学生が,将来どのような暮らしをしているのか,彼らが幸せに生きていくためにはどのような力を身につけていなければいけないかを考えなければ、現場で教える力は出てこないと、私は思います。

教育の問題は、初年次教育だけを何とかすればよいというものではありません。高等学校教育ともかかわっています。高等学校とは、普通高校、専門高校、総合高校など、設置形態によって基礎的な知識の教え方も一様ではありません。こうした高等学校の状況のなかで、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」を、そして「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」を、なぜ導入するのでしょうか。

また、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーという三つのポリシーを、今年度中に文部科学省が公表を義務づけると思います。なぜ、義務づけるようになるのでしょうか。

子どもが直面している社会・教育問題は、たくさんあります。子どもや学生は、スライドに示しているような問題に巻き込まれながらもがいていると思います。

こうした状況で、高大接続答申には、総論として、小中学校については、仲良し同士であっても協同学習、グループ学習はかなり取り入れられていると述べられています。高等学校とはかなり違う状況にあるわけです。

全国学力テストの小学6年生の国語B問題は、自分の考えを理由や根拠を明確にして書くという記述式の問題です。全国学力テストでは、小学6年生には国語と算数、中学生には国語と数学で、記述式の問題が出題されています。小・中学校については、探究的な学習に取り組む学校ほど全国学力テストの成績は概ね良いという結果が出ています。いじめの問題、家庭環境など、問題はさまざまですが、小・中学校段階では協同学習が大切であり、答えのない問題に挑戦していくことが重要であるという認識が、全国的に広まっていると考えられます。初年次教育でも同様です。

では、高等学校はどうでしょうか。高等学校の大きな課題の1つは、学力中間層の学習

時間が15年ほどの間に半減したことです。スライドに示している資料にあるように、1990年から2006年までの間に、平日1日の学習時間は約110分から約60分まで急減しました。これは、18歳人口が激減した時期と重なっています。なぜ勉強しなくなったかというと、大学入試が簡単になったからだと思います。大学全入時代になり、学力が中間ぐらいの生徒は昔ほど勉強しなくても大学に入れるようになりました。大学の基礎的な授業も分からないという状況が起きています。

次にご覧いただくスライドは、高校生の進路意識に関する調査の結果です。ほとんどの高校生は「将来に対する不安感を持っている」ということが分かります。「将来についてどうしたらよいかが分からない」「自分は何をしたらよいのだろう」「大学に行ってどうすればいいのか」という不安感が高校生にあることは、確かでしょう。

大学生の学修時間はどうかというと、平均して10人に7人ほどの学生は1週間の自習時間が5時間以下、0時間が10%近くいるというデータがあります。

なぜ、本務ではない私がここで強く訴えているかというと、20年後、30年後の学生や子どもに、本当に幸せになってもらいたいからです。そこで検討すべきは、次の三つの課題だと考えます。すなわち、1)十分な知能・技能を持つ、2)それを活用できる思考力・判断力・表現力を臨機応変に発揮できる、3)主体性を持って多様な人々と協力して学び、働く。しっかり検討した結果を自分のこととして共有しないと、「多様な人々と協働して」と中央教育審議会の答申にあるのはなぜかが、分かりにくいと思います。

教育の転換を図っていくためのさまざまな改善・改革案が中央教育審議会の答申で示されています。私は、この答申の内容に総論としては賛成ですが、各論についてはいろいろ課題があるのが現状だと思います。実際に議論しているのは、一つが学習指導要領の改訂、もう一つが高大接続システム改革で、二つが柱として連動しながら議論されています。高大接続システム改革についての議論の中で、学習指導要領改訂の議論が並行して行われています。2020年までに高大接続システム改革を開始すると、展望のところに書いてありますが、それは、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」が2020年に始まる、という意味です。

高大接続システム改革についての議論には、五つの重要なポイントがあります。

第1のポイントは高等学校の教育改革で、学習指導要領を抜本的に改訂することです。 さらにその中身は、アクティブ・ラーニングを高等学校教育に全面的に入れていきたいと いうことです。現在、学習指導要領には学ぶ内容は書いてあるものの、学ぶ方法はほとん ど書かれていません。次の学習指導要領で学ぶ方法を明記できるでしょうか。

学ぶ方法を明記するためには、検討しなければならない課題があります。学んだことをどう評価するのか、アクティブ・ラーニングの評価をどうするかです。高等学校の場合は指導要領にも調査書にもかかわってきます。高大接続改革には、学習指導要領と調査書の改革も入っています。また、高等学校教育改革の学習指導要領改訂では、新しい科目を導入するための議論も始まっています。歴史総合、地理総合、公共、数理探究の四つが新科目の案として出ています。英語はスピーキングとライティング、国語は文章構成力、情報は社会と情報あるいは情報科学のどちらかを入れていきたいということです。これに関連して、これらの科目に対応したテスト科目を「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」に、いかに取り入れていくかという議論が始まりつつあります。

第2のポイントは、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」を高校2年生と3年生が2回ずつ受けるようにすることです。高校生の時から、自分で次に向かってチャレンジしていける仕組みにしたいという考え方に基づいています。「高等学校基礎学力テスト(仮称)」によって高等学校段階での十分な知識・技能を定着させ、思考力・判断力・表現力の評価に活用できるように、高大接続改革に取り入れていきたいとしています。「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の問題の作成方針については、検討がかなり進んでいます。

第3のポイントは、大学の教育改革です。これには、二つ論点があります。一つは、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーという、先ほどお話しした3ポリシーの公表を義務づけることです。もう一つは大学の認証評価制度で、この第3サイクルが2018年度に始まります。そこに向け、大学評価に高大接続改革の中身を入れていきたいという議論が始まっています。また、高等学校から大学に提出する調査書をどう扱うかの議論も始まっています。特に大規模大学は受験者数が多いので、調査書をどう扱うかは大きな課題になります。

第4のポイントは、個別大学における多角的評価です。「高等学校基礎学力テスト(仮称)」によって、知識・技能をある程度しっかりカバーしてもらいたい。今後は、高等学校の教育もアクティブ・ラーニングの導入によって変わっていくと思います。学生の大多数は卒業後、社会に出ていろいろな暮らしをしていきますが、そこでは卒業した大学の看板を背負っています。それぞれの大学に、ポテンシャルを持った学生に入ってきてもらうためにどうするのか、入ってきた学生を育てていくためにどうするのか、それは、個別の大学に考えていただかなければいけません。小論文や面接、集団討論など、方法はいろいろあると思います。それぞれの大学に合った多角的な選抜方法で、大学の看板を一生背負って幸せになっていけるような学生を見つけていただきたい。そして、大学という看板を立てていくからには、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性を持って多様な人々と協力して学び、働く」、この三つを、各大学の特色を生かしながらしっかりと学生に身につけさせていっていただきたいと思います。

第5のポイントは,「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」。第4のポイントとして挙げたアクティブ・ラーニング導入によって,特に思考力,判断力,表現力の評価を後押ししていきということです。

高大接続システム改革は、これら五つのポイント全てをクリアしなければ成就しません。知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性の三つで高校・大学間の全体をカバーする構造をつくっていきたい。これが、高大接続システム改革です。

高大接続システム改革の総論は、これまでお話ししたようなことです。しかし、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」ばかりが大きく取り上げられる傾向にあります。その理由はセンター入試にも絡み、入試改革のようにとられているためだと考えます。高大接続改革は、入試改革ではなく教育改革です。それを押さえたうえで、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」で特に評価すべき、思考力・判断力・表現力の評価法については、まだ解決しなければならない課題があります。問題の作成法・方針、採点の方法、コンピュータテストの実施法、予算の問題などです。これについて高大接続システム改革会議で議論が行われており、今年度内にはおそらく最終報告が出されると思います。

特にこれから高校では科目全体が変わっていきますし、科目全体にアクティブ・ラーニ

ングが導入されていくと思います。小・中学校では協同学習の導入が進んでいますし、高校でも取り入れていくと思います。では、新しい教育を受けた学生が入学してくることを前提として、大学はいかなる教育を行っていったらいいのか。これを考える必要があります。大学で学んだ内容が社会でどのように役立っていくのかは、とても重要です。

ここまでは高大接続改革の話をしてきました。高大接続改革のこれからのスケジュール を簡単にお話しておきます。

2020年には、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の導入が予定されています。その前年の2019年には、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」が導入される予定ですが、2017年からモデル校などでプリテストが始まることになります。大学では、2018年からプリテストが始まるだろうと思います。高等学校では、当初は数学・英語・国語に科目を絞っていくことになります。高等学校は選択科目が多いので、まずこの3科目で始めようということです。

次期学習指導要領の導入は、高校1年が2022年、高校2年が2023年、高校3年が2024年に予定されています。これを踏まえて2024年に高校3年まで学習指導要領が新しくカバーされます。この時期と2019年の「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の実施の時期がずれています。「高等学校基礎学力テスト(仮称)」は2017年にプリテストを行い、2019年に本テストを3科目で導入して、いろいろな経験を積んで、2023年に高校2年生の学習指導要領が改まったところで、新しい指導要領に沿った「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の問題が出てきます。つまり、2024年になってはじめて、高校3年生までカバーされるということです。今から10年後です。

「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」は、2018年頃からプリテストを行い、2020年に導入します。学習指導要領の改訂に伴って経験を積みながら、新学習指導要領に準拠した大学のテストを2024年まで段階的に積み上げて完成させていくということになります。では、大学初年次教育の課題に進みます。

一つめは、初年次教育と高等学校教育との関係です。アクティブ・ラーニングは小中校ではかなり取り入れられて教育が変わってきていますし、一部の大学の初年次教育にも導入されています。高校では、今のところ小・中学校や大学初年次教育ほど浸透していませんが、これから高大接続改革が進めば、本格的に導入されていくと考えられます。高校にアクティブ・ラーニングが広がっていった時、学生が社会で幸せに生きていく学びを身につけるために初年次教育で何をすべきか、大学は考えざるをえなくなるでしょう。

二つめの課題である,初年次教育と大学教育の関係でも同様のことが言えます。初年次教育を大学の全体カリキュラムにどのように生かすのかを考えなければなりません。私の経験から、大規模になればなるほど、初年次教育とその後の教育を融合させていくことは簡単なことではないと言えます。

三つめは、初年次教育と社会とはどのような関係にあるかです。いろいろな考え方があるかもしれませんが、考えなければならないのは、小学校、中学校、高校の教育が変わった時に、大学の初年次教育が社会といかに関係をもっていくのかということです。後ほどお話しますが、初年次教育に産学協働のプロジェクトを取り入れようとした時、「大学に入ったらまず学問をすることが先だ」「大学では自分のベースになることを身につけることが大事だ」「いきなり1年生で産業界を持ってくるなんてとんでもない」などとよく言われました。

四つめは、選抜性の違いです。普段はなかなか言いにくいことですが、述べさせていただきます。選抜を実施するだけで大変な大学と、ほとんど選抜をしない大学があるということです。また高校も同様で、全国区の受験高校もあれば、なかなか学生が来てくれなくて先生方が困っている高校もあります。こうした学校の中身の違いを抜きにして、「大学全体はこうあるべきだ」「高校全体はこうあるべきだ」と言ったところで、現実には自分の学校にそぐわないことになりがちです。

まず、選抜性の高い大学、いわゆる高偏差値の大学についてお話しします。そうした大学を卒業した学生は、世界に出てしっかりした生活指導ができないとおかしいと思います。しかし、本当にできているかというと、卒業生の半分ないし3分の1は世界に出たら通用しないと、私は思っています。

また、全国区の受験高校の校長先生からは「高大接続改革をなぜ始めたのか」「必要ないではないか」「今の教育でいいではないか」、さらに、「勉強だけでなく部活にも力を入れている」「文化祭にも運動会にも一生懸命に取り組んでいる」などと言われます。私は、こうした先生方に申しあげます。「皆さんの学校の生徒さんはおそらく、世界に出てリーダーとして、さまざまな国の人と仕事をするようになるでしょう。しかし、そういう人たちと一緒に一人前にやっていけるだけのことを、高等学校で身につけたと言えますか」と。答えは返ってきません。社会に出たら全く知らない人たちと仕事をするわけですから、いつもつき合っている人とグループを組んで学習したところで、コミュニケーション力はつきません。つまり、受験勉強に一生懸命取り組み、いわゆる偏差値の高い大学に入ったとしても、それだけでは社会で必要な能力が身につかないわけです。私は、そうした例をたくさん見てきました。選抜性の高い大学や高等学校は、大きな課題を抱えていると思います。選抜性がさほど高くない大学は、高等学校でしっかりした知識を身に付けてもらい、自分でアクティブにやっていきたい気持ちを見つけてもらう。そして大学で、それをもっと伸ばして育てていくことだと思います。

大学で主体性、知識、思考力をしっかり身につければ、若い人たちにとって仕事のチャンスは広がります。それぞれの大学が大学の特徴を活かしながら、それぞれの大学で自分を活かして力を発揮できる学生を育てていくことは可能だと思います。そして一番大事なことは、卒業した学生が将来、幸せになっていくことです。偏差値云々の時代ではないのです。日本ではよく、この高校はすごいね、あの大学はすごいねと偏差値で評価されます。しかし、選抜性の高い高校や大学には、社会や時代の求めに応じた教育を展開できるかという、大きな課題があることもお伝えしておきたいと思います。

チームワークの意味についてもお話しておきます。知らない人が集まって、協力しながら目標を達成していく、自分も主張するし人の気持ちも感じることができる、それをチームワークと呼んでいます。仲良し同士でグループ学習して、仲間内だけで発表することとは全く違います。

ここからは Future Skills Project 研究会 (FSP 研究会) の活動についてご紹介していきたいと思います。

急変していくこれからの時代のなかで、大学生にとって大事なことは、一つは社会で暮らしていくことがどういうことかを、できれば早い時期に知ることです。もう一つは、知らない人とチームワークを組ませ、大学でしっかりトレーニングをしていくことです。よ

り実践的なトレーニングにするために、産業界の人に加わってもらっています。産業界の人を招いたのは、就職活動とは全く関係がありません。今まで会ったことのない人たち、年齢も離れている人たちが、どういう考え方をしているかを知る機会を、大学初年次から持ったほうがいいと考えたからです。

FSP 研究会の活動は 2010 年 7 月に始まりました。6 企業の人材開発責任者の方々と 5 大学の学部長、副学長に来ていただき、大学での人材育成のあり方について議論するところから始めました。企業の方は「新入社員は挨拶もできない」、学部長の先生方は「企業のために教育しているのではない」と、そういう議論から始まって 6 年間、さまざまな議論を重ねました。

そこから浮かび上がってきた共通のキーワードが、「主体性」でした。自分から何かをしようと実践しなければ、外から主体性を引き出すことはできません。主体性を持ちなさいと言っても、どうやって主体性を身につければよいかが分からない学生が多いのです。小学生であれば親が援助できるかもしれませんが、大学生に対してはなかなかできません。そこで、大学1年生の春学期からFSPの授業を取り入れたらどうだろうと考えました。学生が自分から何かを求めていきたい、目標を持ちたいという気持ちを早く持ったほうが、その後の大学での学びに効果があります。

一つお知らせをさせてください。FSP 研究会は毎年シンポジウムを行っています。今年は12月25日に、「まなぶとはたらく(仮題)」というテーマのシンポジウムを明治大学で行います。ご関心のある方はぜひお越しください。

繰り返しになりますが、FSP研究会は就活のためのプロジェクトではありません。

これまでの5年間,FSP研究会では様々な実践講座を行ってきました。例えば,「真に答えのない問題(テーマ)」にチャレンジしてもらいたいということで,企業の人たちに問題を出してもらいます。企業の人も答えを模索しているような問題を大学1年の春学期に出します。

卒業要件単位に算入される,正規の授業であることも重要です。FSP研究会の授業では単位認定されない授業は授業と呼ばないことにしています。学生にとって、単位がとれるかどうかは、その授業を受講するかどうかの大きな決め手になります。単位を取れる授業にするためには大学の教授会の承認が必要ですが、「1年生から産学協同の授業をやるとは何事だ」と猛反対されることが多く、実現までこぎつけるのはなかなか大変でした。しかし、そういう過程を経た大学が、現在では大規模大学だけではなく地域の大学、単科大学も含めて20大学、そして約60の企業に参加していただいています。

FSP の授業は1学期に15コマあります。6~7人でグループをつくり、上司役である企業の方が出した課題を解決するために、目標設定や活動計画をディスカッションし、プレゼンテーションに向けて準備をします。企業の方へのプレゼンテーションは中間発表と発表の2回です。2つの企業に参加していただきますから、計4回、発表の機会があります。1回目の企業のときには、どうにもなりません。プレゼンを受けた企業の方からは、「こんなことでは企業で通用しない」「遅刻するような社員は要らない」といった厳しい意見が出されます。学生は、ここではじめて社会の厳しさに気づくわけです。

また、講師の側が教え過ぎない、我慢するも大切です。こうしたさまざまな研究を積みながら、2015年度までに大学1年春学期を中心に延べ6,000人が受講しました。

スライドに示すように、企業からは相当難しい問題が出されています。後ほどご覧ください。

FSP 講座に反対する先生方からの声もあります。大学1年生に関わっている先生からは 猛反対されました。その声をスライドにまとめています。また、「うちの大学に大企業から来てもらうことなんて無理だよ」という声がありますが、そんなことはありません。産業界の方にはボランティアで来ていただいています。招いている人の役職は人事部長ですが、1年生に関わっても人事部長にはほとんど意味がないでしょう。むしろ、会社からは そんなことになぜ関わるのかと、注意されると思います。

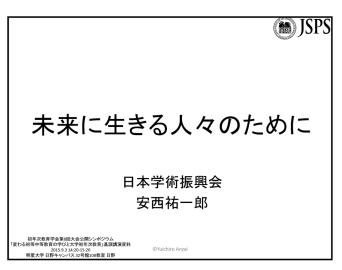
FSP 講座に参加した企業・大学からの感想に「知識や語彙以外は上級生と変わらない」 とあります。1年生の1学期でも上級生たちと変わらないアイデアを出しながら一生懸命 ディスカッションしています。そのことを示していると思います。

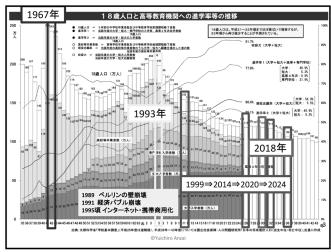
また、FSP研究会の授業のための自習時間は、一人当たり平均75.8時間と、たくさんの時間を使って予習をしています。1学期に2つの企業が関わっていますが、1回目の企業のときと2回目とでは、お互いのディスカッションの仕方が全く違います。より主体的に取り組むようになります。これは大事なことだと思います。

スライドの写真は参加いただいた企業の方々です。大学と産業界は対立するように思われています。しかし、企業の人たちと大学の人たちが、これから学生をどう育てたらいいのかについて、共通の意識をもって信頼関係をもっているからこそ実践できるのです。企業の人が自分の会社に学生をひっぱりたいという気持ちがあったとしたらできるはずがありません。卒業生が出ていますが、彼らがこれらの企業に入社したということはありません。

企業では「人事部長がなぜそんなことをしているのか」,大学では「産業界の人を1年生の授業に連れてくるなんて」といった声があるなか,FSP研究会はこれまで様々な議論を重ね活動を続けてきました。結果として,立派な学生が卒業し,社会人になっています。社会人になった後もフォローしていきたいと思っています。

本日は高大接続改革の問題、初年次教育の例として FSP 研究会のことをお話ししました。ご清聴ありがとうございました。





数字は万人(概算) 小学校 幼稚園 幼児教育 庭域 普通高校 | 専門高校 | 総合高校 高等専門学校 就職等 高等学校教育,車修学校教育,高等専門学校教育 高等学校学習指導要領/指導要録 普诵教育 高等学校基礎学力テスト 生徒個人による活動経歴 一般 入計 援を必要と 不登校や -般入試を 専門学校 以外を経て 高校中退 就職等 する生徒、 社会人 経て大学 進学(33) 等に進学 大学進学 発達·学習 等を経験し (20) (雇用· 如遇) (27)障害を抱え た生徒(5) 大学入学希望者学力評価テスト 個別大学アドミッション・ポリシー/多角的評価入学者選抜 入学者選抜 実施要項 認証·評価 個別大学のカリキュラム・ポリシー 就職. 大学院 統合3ポリシ 個別大学のディプロマ・ポリシー 社会人(雇用:処遇)

# 子どもたちの直面する社会・教育問題

2

- 少子高齢化の急速な進行と生産年齢人口の減少
- 産業構造・労働市場の構造変化

1

- 雇用の混乱ー正規・非正規雇用の分裂、就活の手続き
- 地域経済の窮迫と地域社会の過疎化
- 社会保障費の急増と国家財政の逼迫
- 国際的求心力の喪失(Japan passing)
- 他国・他地域との国際関係
- 格差(所得格差、学歴格差、知識格差、家庭格差…)
- 児童虐待・いじめの急増
- 就学前教育費・高大教育費負担と少ない公財政支出
- 高校教育の多様化、大学「入試」の諸問題
- 大学入学者選抜における高校・大学教育との関係の諸課題
- 大学教育のユニバーサル化、カリキュラム・卒業資格の諸課題
- 大学と社会(地域・国際社会、産業・労働・雇用構造等)との関係
- その他

3 4

# 社会改革としての「教育の転換」

課題: 十分な知識・技能をもち、それを活用できる思考力・判断 力・表現力を臨機応変に発揮でき、主体性をもって多様な 人々と協力して学び、働くことのできる力が身につく教育の 機会をすべての子どもたち持てるようにするにはどうすれば よいか?

展望: 2020年までに「高大接続システム改革」を開始。

#### 何がどう変わるのか?

- 家庭・子育で・幼小中学校段階の変化 (1)
- **(2**) 高校教育改革、学習指導要領の抜本的改訂
- 3 職業教育改革
- **4**) 大学教育改革・個別大学の入学者選抜方法改革
- **(5**) 企業等の採用・処遇等の仕組みの改革
- **6**) 地方創生への貢献
- 高大接続システム改革

#### 学習指導要領の改訂と高大接続システム改革

1. 学習指導要領の改訂 2014.11.20

文部科学大臣諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」 Ⅱ. 高大接続改革 2014.12.22

中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大 学教育、大学入学者選抜の一体的改革について ~ すべての若者が夢や目標を芽 吹かせ、未来に花開かせるために~」



高校教育を受け身の教育から能動的学習へ。

「高等学校基礎学カテスト(仮称)」の導入。

国語、地歴公民、理科、数学、英語、情報、総合的学習の時間等の内容の再検討。 個別大学における3ポリシー(アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプ ロマ・ポリシー)の公表と実践。

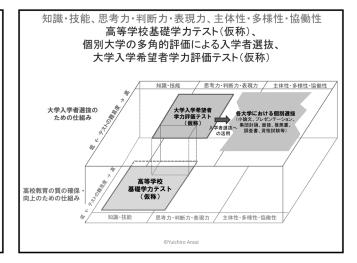
「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の導入

個別大学の入学者選抜における多角的評価方法の導入。

その他。

#### 高等学校新学習指導要領の策定に向けて

- 新しい学習方法、指導方法、学習評価方法の導入
- 科目再編、新科目の導入、科目内容の再検討
- 国語: 科目内容の再検討
- 公民: 新科目「公共(仮称」)の設置を検討
- 歴史: 新科目「歴史総合(仮称)」の設置を検討
- 地理: 新科目「地理総合(仮称)」の設置を検討
- 理科・数学: 新科目「数理探究(仮称)」の設置を検討
- 外国語: 4技能を総合的に重視する方向で科目再編・内容再検討(4技能総合型の科目、発信能力育成を強化する科目など)
- 情報: 科目再編・内容再検討(情報と情報技術を問題発見・解決に活用す る科学的考え方等を育成する科目へ)
- その他の科目、道徳教育、総合的な学習の時間等
- 専門学科等
- 特別支援教育,特別支援学校 3
- 数員養成(研修,採用)等に向けて 4
- 高等学校基礎学カテスト(仮称)(当初は国語総合、数学I、コミュニケーション英語Iを上限、ただし思考カ・判断カ・表現カの判定も導入)との関係 5.
- 大学入学希望者学力評価テスト(仮称)(思考力・判断力・表現力の判定が中心、記述式問題の導入、高等学校新科目対応等)との関係
- 7. その他



7 8

# 3度の教育転換期(明治、戦後、現在)

#### 特徵

- 明治 漢学から洋学へ、小中学校の急速な整備、国民皆教育、ドイツ流大学制度 の導入
- 戦後 米国流教育の導入、高校大学の全国的整備、理工系修士課程の整備
- (1990年代~現在へ) 若年人口の急減、高卒就職者数の急減、(中)高大の詳細な序列化
- 現在 子どもの貧困率の上昇、高校生の目標喪失、大学と社会の関係の喪失、グローバル化・多極化の中での教育の国際競争
- B) 転換期の共诵性
- 質的転換の進行
- 地域・所得等の影響の克服
- 世界の大きな流れへの合流新しい社会への適応、新しい社会への適応、新しい知識・学習方法の学習
- 新しい教育方法・教育評価方法の導入
- 日本の教育改革
- 高等学校教育の質的転換、能動的学習方法・教育方法の導入
- 新学習指導要領(高校2022~;小中高の国語,地歴公民,理数,英語,情報ほか)
- 高等学校基礎学力テストの導入(2019~)
- 大学教育の質的転換、3ポリシーの公表と明確化
- 大学入学希望者学力評価テストの導入(2020~)
- 大学入学者選抜における多角的評価の導入
- 職業教育、ほか幼小接続、小中接続、教育委員会改革など多数

# 大学初年次教育:議論の方向と課題

- ▶初年次教育と高等学校教育(初等中等教育)
- ▶初年次教育と大学教育
- ≫初年次教育と社会での仕事
- ▶選抜性による違い
- 主体性 多様性 協働性
- 思考力·判断力·表現力
- 知識•技能
- 臨機応変力・学習継続力・構想力
- チームワークの意味

9 10

# Future Skills Project研究会(FSP研究会)。の活動



日本の社会に活気を取り戻すために、 海外の人材に日本の若者が負けないために、 産学が当事者意識を持って連携し、

- 【1】「社会で活躍できる人材をどのように育成すべきか」を議論する
- 【2】課題と解決の方向性を共有し、解決に向けて実践する
- 【3】実践結果から得た知見を広く公開し、実践者を増やしていく



計長・学長 ではなく部長





6年にわたる議論 5年間の実践

FSP研究会ホームページ http://www.benesse.co.jp/univ/fsp/

# Future Skills Project 研究会の挑戦

2010年7月 FSP(Future Skills Project)研究会(6企業、 5大学)発足

2011年11月 第1回産学協同就業力育成シンポジウム 社会で活 躍する人材を育成するために「産」「学」は何をすべきか

2012年12月 第2回シンポジウム 学生の主体的な学びをどのよう にして実現するか

2013年11月 第3回シンポジウム 主体性が学生を変える 学生 が社会を変える ~広がる 学生の本気を引き出すFuture Skills Projectの挑戦~

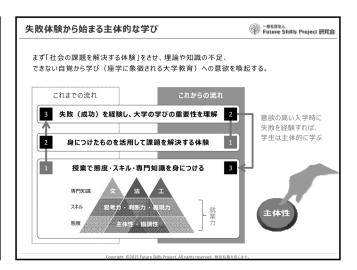
2014年11月 第3回シンポジウム 未来を創る「主体的な学び」を 実践する ~Future Skills Project研究会4年間の挑戦~

2015年4月 一般社団法人Future Skills Project研究会創設 2015年12月25日 (予定) 第5回シンポジウム 明治大学アカデ ミーホール 「学ぶとはたらく」(仮題)

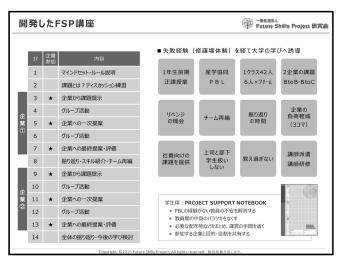
⇒ FSP研究会ホームページ http://www.benesse.co.jp/univ/fsp/

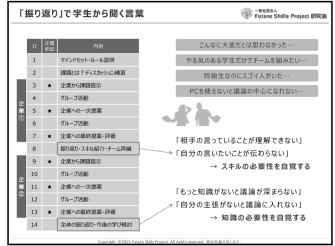
#### FSP研究会4年間の実践による「発見」

- 日本の大学生に最も必要な、最も基本的な力とは何か?
   ⇒主体性⇒主体性とは何か?⇒どうすれば身につけられるのか。
- 「(真に)答えのない問題」に対し、初めて会った人たちとの チームワークで答えを見出そうと努力するトレーニングを繰り 返す。
- 3. (大学)1年生の春学期が最適。
- 4. 「単位」を取れる正課の授業として実践することが重要。
- 5. 1学期間に2企業、1企業概ね7週。少人数のチーム。学生の本気が試されるトレーニング。
- 6. 講師の側が「教え過ぎない」、「我慢する」。
- 7. 企業業種・規模・地域、大学設置形態・分野・規模・地域等に よらず可能。(2015年度までに約60企業、約20大学が参加。大学1年春学期を中心に延べ6000人余受講。)
- 8. 教える側の異質な関係者同士の緊密な信頼関係、目標の共有、風通しの良いコミュニケーションが必要。

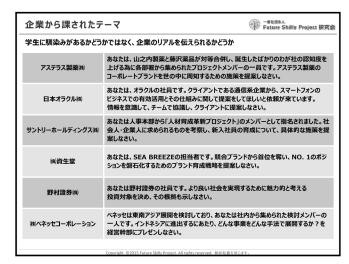


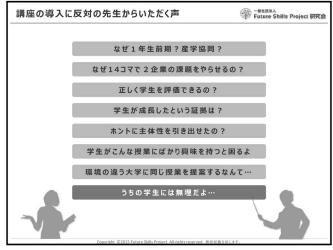
13 14

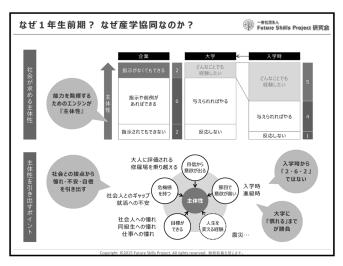


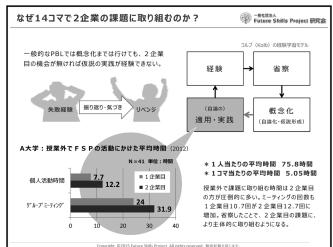


15 16

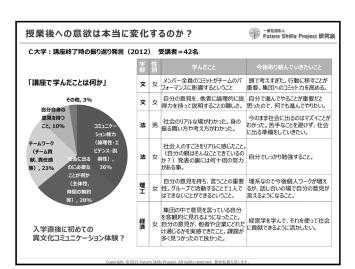


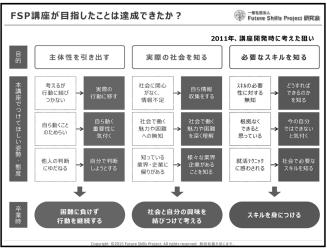




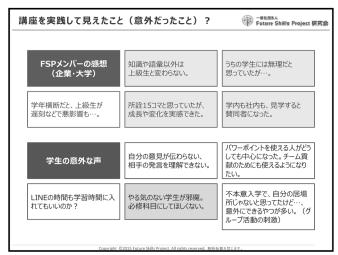


19 20





21 22







<u>このページ以降は</u> 参考資料 「学力」とは何か

(学校教育法第30条2項, 49条, 62条, 中教審答申2014.12)

- 小学校·中学校
  - ・生きるカ = 豊かな人間性 健康・体力 確かな学力
- ・(確かな)学力 = 基礎的な知識および技能 これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力 主体的に学習に取り組む態度

#### 高等学校

- ・生きるカ = 豊かな人間性 健康・体力 確かな学力
- ・(確かな)学力 = 基礎的な知識および技能 これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力 主体的に学習に取り組む態度⇒主体性を持って多様な人々と協働し、学ぶ態度

#### 大学

・(確かな)学力 = (大学の水準での)基礎的な知識および技能 これらを活用して課題を解決するために必要な(大学の水準での)思考力・判断力・表現力等の能力 (大学の水準で)主体性を持って多様な人々と協働いべ学ぶ態度

25 26

# 主体性•多様性•協働性(1)

- 1. 主体性とは、自分の目標を自分で見いだし、実践する力 (≠一人よがりの主張パワー、≠人の意見をきかないパワー)
- 2. 自分の目標をもっている人の心は、その目標が達成されやすいように働く。 (『問題解決の心理学』中公新書,1985)

問題解決の心理学

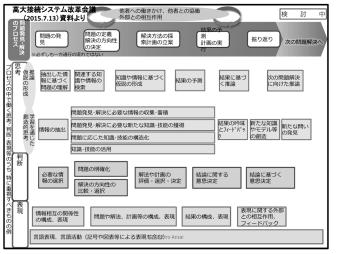
- 3. 主体性は、<u>人の心を感じる力、多様な人々と協働する</u> 力をもたらす。
- 4. 主体性は、多様な人々と<u>情報を共有する力</u>をもたらす。
- 5. 主体性は、<u>想像力、臨機応変力、並行処理力、</u> 人間としての一貫性をもたらす。
- 6. 主体性は、<u>学び続ける力、内省する力、</u> <u>創造的に思考し実践する力</u>をもたらす。
- 7. 主体性は、答えのない問題に答えを見出す力をもたらす。
- 8. 主体性は、<u>チームワークカ</u>をもたらing Anzai

#### 主体性 - 多様性 - 協働性(2)

- 問題解決力: 答えのない茫漠とした状況(未知の他者との 遭遇を含む)を「問題」として理解し、答えを見つけ出す力 (答えがある問題(従来のマークシート記入方式のペーパー テストの問題等)を解く力ではない。)
- チームカ: 多様な他者とのチームの形成、共通目標の生成、未知の他者の心を感じるコミュニケーション、知識・技能の活用、チームへの貢献
  - (仲良し同士だけが集まって与えられた問題を解く力ではない。)
- ・ 臨機応変力: 答えのない茫漠とした状況(未知の他者との 遭遇を含む)で迅速に的確な判断をし、行動する力 (適当にあっちを向いたりこっちを向いたりする力では ない。)

©Yuichiro Anzai

27 28



#### 知識•技能

1. 知識•技能:

自ら記憶した情報 自ら意味づけし、関連づけした情報 自ら活用できる情報 他者と共通した情報

ただし

知識:事物・できごと・性質やそれらの関係についての情報 技能:行動・活動やそれらの関係についての情報

2. 知識・技能の活用力: 知識・技能を、文脈に応じて応用 する技能

情報を抽出する・組み合わせる・抽象化する・吟味する・大事な情報を選ぶ・適切な表現の方法を創る・別の方法を工夫する・別の観点からみる・別の文脈でとらえる・その他多数

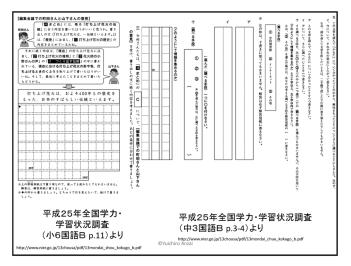
## 未来に生きる子どもたちのために For Children Towards Their Futures

- ・ 主体的に生きる
- ・ 多様な人々と生きる
- 協力して生きる
- 感謝して生きる
- 誇りにして生きる

#### ★「生きる」を支えるのは

- ・ 気持ちの通い合う人のつながり
- いつも変わらず応援してくれる人たちの存在
- 安心して戻れる場所
- 一生振り返ることのできる温かい記憶

全千葉県幼稚園連合会基調講演(2015.7.28 10:30-12:00 幕張メッセ 千葉)配布資料より



31 32

# From McDougal Littell, Modern World History: Patterns of Interaction

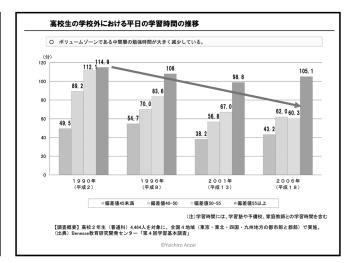
Section 1: Reading Critically

- Determining main ideas Following chronological order
- Clarifying; Summarizing Identifying problems and solutions
- Analyzing causes and recognizing effects
- Comparing and contrasting Distinguishing fact from opinion
- Section 2: Higher-order Critical Thinking
- Categorizing
- Making inferences
- Drawing conclusions
- Developing historical perspective
- Formulating historical questions
- Making predictions Hypothesizing
- Analyzing motives Analyzing issues
- Analyzing biases
- Evaluating decisions and courses of
- Forming and supporting opinions 

  ©Yuichiro Anzai

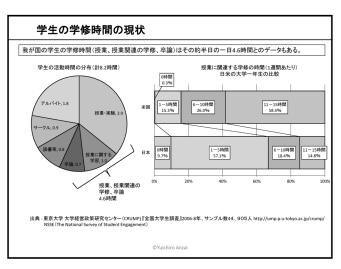
Section 3: Exploring Evidence: Print, Visual, Technology Sources

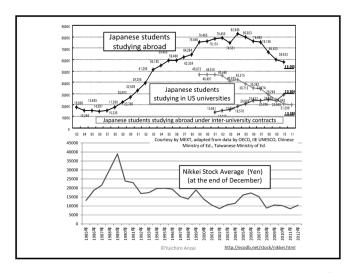
- Analyzing primary and secondary sources
  Visual, audio, and multimedia sources
- Using the Internet
- Interpreting maps
- Interpreting charts
- Interpreting graphs
- Analyzing political cartoons
- ction 4: Creating Presentations
- Writing for social studies Creating a map
- Creating charts and graphs
- Creating and using a database
- Creating a model
- Creating/interpreting a research outline
- Crating oral presentations
- Creating written presentations



33 34

#### 高校生の進路意識 進路について考える時の気持ち(普通科) 「将来自分がどうなるか不安になる」 ■全くそうである ■まあそうである ■あまりそうではない ■全くそうではない 日本 12.8% 3.4% 米国 10.4% 中国 13.2% 韓国 12.9% 3.2% 0% 60% 80% (出典)(財)一ツ橋文芸教育振興会、(財)日本青少年研究所「高校生の進路と職業意識に関する調査報告書(2013年3月)」





#### Japanese Students Studying Abroad

The Number for 2010/The Number for 2000  $\nearrow$  or  $\ge$  \*,\*\*

(Numbers in parentheses are those for 2010.
Only countries with more than 1,000 for 2010 are noted.)

Asia 1.42 (20,842):

China 1.22 (16,808), South Korea 1.87 (1,147), Taiwan 1.26\*\*\* (2,302)

Europe 0.94 (10,215):

UK 0.62 (3,851), Germany 1.05 (2,135), France 1.21 (1,743)

Oceania 1.18 (3,401):

Australia 1.10 (2,413) North America 0.49 (23,387):

USA 0.46 (21,290), Canada 1.42 (2,097)

- Central and South America 19.33 (174)
- Middle and Near East 1.86 (41)
- Africa 0.00 (0)

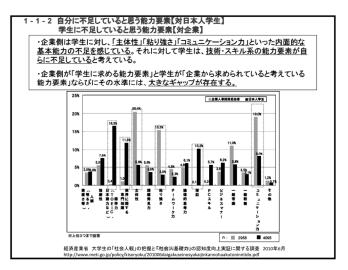
■ Total 0.76 (58,060) Total (USA excluded) 1.23 (36,770)

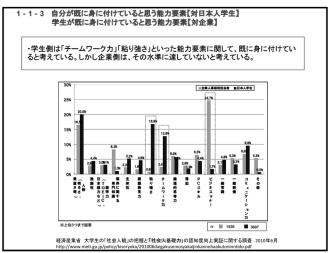
\*Source: "Open Doors" for US, Ministry of Ed. for China, Ministry of Ed. for Taiwan, OECD Ed. at a Glance for OECD countries (except CBIE data 2001 for Canada 2002 & 2003), UNESCO Inst. for Statistics for others.

\*\*\*The approx. number of Japanese 18-yrs-olds in 2010/that in 2000 = 1.22M/1.51M = 0.81.

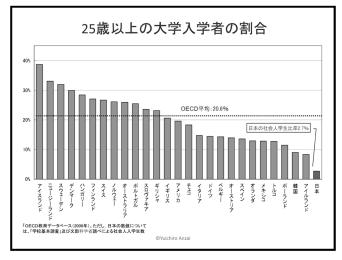
\*\*\*2010/2002

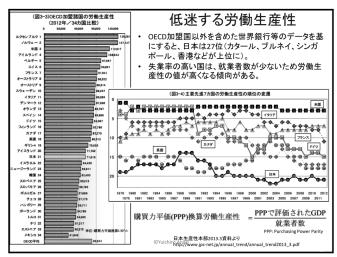
37 38





39 40





# THE GLOBAL AUCTION THE BROWN, HUGH LAUDER, AND DAVID ASHTON THILLIP BROWN, HUGH LAUDER, AND DAVID ASHTON THE CALABOTOMES OF Education (Control of Control of Con

# 第2部<報告とパネルディスカッション>

# 質疑応答

#### 菊地

では、これより基調講演「未来に生きる人々のために」に対するご参加の皆様の質問に、安西先生からお答いただきます。まず、「学生の主体性を引き出し、授業外学習時間を評価させる FSP の活用は効果的だと思いますが、結局、教師は何をしているのでしょうか」という質問です。

#### 安西

教師の役割とは、それぞれのチーム (7~8人) の発表の仕方の助言者としての部分が多いと思います。産業界の方と大学の先生が一緒にペアでやっています。そういうなかで関係学部の内容の場合、例えば、経済学部であれば経済学の先生と企業の方が一緒にいたりします。経済学の立場から見てどういうことかを助言するわけです。できるだけ我慢すること、教えすぎないこと、「これはこういうことだ」と先に言わないようにすることが肝心だと思います。これは経験から出てきたことで、そういうことを FSP 研究会では開示しております。

#### 菊地

今お答いただいたことに関連しますが、「『教えすぎない』というのは理想の教育とはいえ、具体的なイメージがわきせん。お膳だてや尻ぬぐいに膨大な手間暇をとられているのでしょうか」という質問を、同じ質問者からいただきました。

#### 安西

一言でいうと、教えすぎないとは、学生が「こうではないか?」という気持ちがある時に、こちらが「いや、これはこうだよ」と先に言ってあげないというだけのことです。その学生の気持ちが感じられるかどうかは先生側の技量かと思います。難しいことを言っているわけはなくて、学生がここまできた時に、そこの一瞬を我慢するということが大事だということです。

#### 菊地

ありがとうございます。続いて、FSP 講座の実際の進め方についての質問です。「学生がスキルの必要性を認識したときに、そのスキルの習得をどのように行っていますか。例えば、必要な情報を適切に探せないという学生がいた場合、自分で解決しなさいと突き放すのでしょうか。それともチューター役がある程度はアドバイスするのでしょうか。興味深く、賛同できるお話でした。ありがとうございました」ということです。

#### 安西

こういうふうにしたほうがよいということは、授業の中で一人ひとりにある程度は伝えています。ただ、「こういう情報の活用の仕方をしているから、君はAだよ」あるいは「君はBだよ」ということはしていません。チームワークですから。

参加してくれている企業が二つあるので、チームークを変えようと、最初リーダーだった学生が次にフォロワーになる場合も、その逆もあります。全体を定量的に評価するのは

難しいと思います。

#### 菊地

今のお話の確認ですが、1人の学生が孤立して何かスキルを学ぶということではなく、さまざまな多様性を持った仲間と協力しながら、企業の方にも入っていただいて探していく。ただ、それは1回ではうまく身に付かない、発見できない、向上しないということもある。だからチームをシャッフルして新たな他者と出会いながら協力して、また課題に取り組む。これを繰り返していくということでよろしいでしょうか。

#### 安西

二つの企業が一つの学期で縦につながるというのが発見でした。最初の企業の時はなかなかうまくいかない学生が、次のときには溌剌としてくるということはずいぶんあります。そういうことができる、再チャレンジの場をつくってきたことが、非常に大きいと思います。

#### 菊地

1回うまくいかずに心が折れても、チャレンジの機会がもう1回ある。そこがポイントということですね。

続いて高大接続、特に学習指導要領の改訂に絡めてでしょうか。「初年次でさまざまな 実習を盛んに行うような授業が進んでいるところもあります。しかし、大学1年生は他の 科目も履修しており、そのバランスはどうあるべきでしょうか」というご質問です。FSP の活動はかなり学習時間を要する学びになりますが、大学1年生はいろいろ授業をとらな ければいけない。そのバランスをどうお考えになりますかというご質問です。

### 安西

FSP 研究の追跡調査では、1学期当たりの自習時間はだいたい75 時間です。15 週間で75 時間というのは、1週間当たり5 時間は1コマの課目を自分で勉強しているということです。先ほどもお話ししましたが、大学生の10人のうち7人は1週間に5 時間以下しか勉強していない。そうした学生の1週間分の勉強は、このFSP 研究会の授業一つだけでカバーできます。では他の科目はどうするのかというと、そういう課目が三つあったら本当に大変です。けれども学生は、主体性をもってやりたいと思って勉強するのであれば、できると思います。勉強をさせられているのか、自分でやりたいと思うのかの違いで、相当な幅が出てくると思います。FSP 研究会の授業の目的とは、大学の3年半ほどの間に、自分が何の勉強にどのように取り組んでいきたいかを、自分の気持ちとして持つためではないかと思います。初年次教育の導入教育だと思ってくださって結構です。

#### 菊地

次に、学生の方からの質問です。「所得、学歴、知識、家庭といった格差が原因で自尊感情が低い子どもたちが多く見られるなか、安西先生ご自身はこのような問題を抱えている子どもたちにどのようなアドバイスをしていただけますでしょうか」。

基調講演の中でも、全ての子どもたちが幸せに生きていけるようにということを強調されておいででした。これに絡めての質問かと思います。お願いします。

#### 安西

そういう学生さん,生徒さんの心の奥に届けるのは大変ですね。なかなか届かない。結局, どれだけこちらが誠実か,燃えているかということによると思います。こちらの気持

ちが燃えているかどうかということは、相手に伝わると、私は信じています。本当に苦労してきた子どもはいるわけで、そこの心の底にはなかなか届きません。ただ、その子どもの気持ちを感じようと、子どもと接していくことは、とてもエネルギーの要ることですが、本当に大事です。

# 菊地

ありがとうございました。